

歴史は未来の羅針盤



『近江日野の歴史』第六巻「民俗編」を刊行しました。本書は、第一章 地域の暮らし、第二章 人と家の暮らし、第三章 四季の祈り、第四章 日野の祭り、第五章 伝承の文化からなります。今回から、各章ごとの概要をご紹介します。

第六巻のタイトルともなっている「民俗」とは、人びとの伝統的な生活文化や伝承文化のことを指します。

その内容は、行事や祭礼から、地域や家の伝統的なききたりに至るまで多岐にわたっています。

今回は、村・町の景観・風土の特徴や、そこで営まれてきた信仰生活や生業なりわいなど、身近な暮らしの様子を取り上げた第一章「地域の暮らし」の概要をご紹介します。

地域のなりたち

第一節は「地域のなりたち」と題して、日野町内にある社会組織の特徴が取り上げられています。

その代表的な存在が、「ムラ(村)」と呼ばれた集団です。ムラは、「ムレ(群れ)」を語源とするといわれ、家が寄り集まった様子を示していると言います。

ムラは、農耕、道やため池の普

請、共有山や用水路などの維持管理、葬儀をはじめとする日常生活の助け合いなど、暮らしのさまざまな場面で重要な役割を果たしました。

こうしたムラの役割は、戦後の社会環境の変化のなかで減少することとなりますが、その自治の伝統は形を変えつつ受け継がれ、今も地域の暮らしのなかに息づいています。

信仰と集団

第二節は「信仰と集団」と題し、人びとの信仰生活を取り上げられています。

日々の暮らしが順調であればあるほど、不安や挫折に直面したとき、人は超自然的なもの、神秘的なものに心の支えを求めてきました。

町内各地の町や村には、大屋根のお寺、村はずれのお堂、路傍に

たたずむ石仏、社殿をともなった鎮守の森など、たくさんのお堂施設がちりばめられています。人びとは、こうした宗教施設を核として、さまざまな信仰集団を組織しました。例えば、神社では氏子集団が組織され、年番神主(社守・宮守)を中心に、四季折々の祭礼行事が行われています。



▲路傍に建つ愛宕護符神塔(大窪・玉屋町)

また町内には、伊勢神宮・愛宕神社・修験の行者など、信仰をもに人びとが集う「講」と呼ばれる信仰集団が結成され、個性的な行事が行われています。

今なお残る多様な民間信仰は、日野の人びとの文化水準の高さと敬虔な信仰心を物語っています。

村と町のなりわい

第三節は「村と町のなりわい」と題し、村や町の生業の様子を取り上げています。

日野町は、鈴鹿山脈の山中を源とする日野川や佐久良川がつくる谷沿いに開けた地域です。多くの村では、農業を軸に、周辺の里山の恵みを活用しながら生計をたててきました。

本節の前半では、村で育まれた稲作・畑作の技術や水利慣行、農作物の豊作を願って行われる農耕儀礼について、詳しく紹介されています。

また後半では、町の生業として、地場産業である合葉あわせくすりの製造・販売の様子や、日野商人の関東出店への奉公の実態が、聞き取り調査をもとに詳しく再現されています。